

人格・責任・応答

——責任という観点からみた人格の同一性に対する考察

石毛弓（大手前大学）

一般的に哲学における人格の同一性の問題は、異なる時間におけるある人格 P 1 とある人格 P 2 が同一であるといえるための必要十分条件を求めるものだ。本論ではこの問いを、人格と責任という観点から考察する。以下でその理由を説明する。

人格の同一性にまつわる議論では、身体的なものであれ心理的なものであれその他であれ、人格において継続されると考えられる要素やその妥当性が俎上に載せられる。たとえば記憶であれば、ある人物の意識が過去の経験を自己のものとして把握することができるかどうかや、ある人物がおぼえている経験と他の人物がおぼえている経験の整合性などについて、それらが人格の同一性の基準となりえるかどうか問われる。さてこの例では、自分がおぼえていることと、他人によって検証されることの両方が挙げられている。実際、大半の人格の同一性の問題では、これらの視点双方を含めて必要十分条件でありえるかどうか論議される。本論ではこの点について、人格の同一性の基準は、ある人物の内省的な視点（主観的視点）の場合と、社会的に検証しうる視点（客観的視点）の場合それぞれに分けて検討すべきではないかという疑問を投げかける。

本論では、主観的視点の基準として心理的連結性／継続性を挙げる。過去における P 1 の心理的な要素を、未来の P 2 が直接的／間接的に保持しているとき、P 1 と P 2 は同一の人格を有しているとみなすという考えだ。この時点では、人格 P における心理的な内容は当人にとって納得のいくものであればいい。一方客観的視点とは、人格 P の心理的な内容が他者の審判にさらされる場合に問題となる。たとえば人物 A がある不動産を所有していると信じており（主観的視点）、法的にもその通りである場合は後者の問題は生じない。しかし、別の人物 B がその不動産の所有者であると申し立てた場合、A の信念が妥当であるかどうか問われる（客観的視点の必要性）。この例は、二つの問題を提起する。一つめは、主観的視点は人格の同一性においてより広い概念であり、客観的視点はそのなかでも責任に関するより狭い概念だという点だ。二つめは、A が不動産に関する自分の権利を主張するなら、B に対して自己の信念について説明する責任をもつという点である。

最初の問題は、人格の同一性にたいして主観的視点と客観的視点の双方が必要であることと、両者の相違点が明確になれば理解されるだろう。後者の問題は、責任という概念の分析および人格の同一性の議論に対してこの概念を適用する妥当性が示される必要がある。この問題については、まず責任の概念を帰属可能性と説明可能性に類型化する。さらに責任は他者との関係およびその関係を説明する能力に関与するという考えから、上述の責任のなかでもとくに応答責任と人格についての考察を行う。人格の同一性の問題を主観的視点と客観的視点に分け、とりわけ客観的視点における応答責任について考察することが本論の目的である。